



## ※ 2016年熊本地震により被災した 装飾古墳の復興に向けて

熊本県において4月14日に発生した前震(M6.5)と4月16日に発生した本震(M7.0)では、多くの文化財が甚大な被害を受けています。2016年度末までに集計された熊本県の報告によると、国指定・国登録文化財301件中100件が、県指定文化財では384件中60件が被災しています。また、これに加えて市町村の被災文化財は198件であり、さらに未指定のものを加えると膨大な量の文化財が被災しているという状況にあります。

熊本県には、石室や羨道に彩色や線刻等の装飾をもつ装飾古墳が数多くあります。日本にはおよそ660基ほどの装飾古墳がみつかっていますが、実にその30%が熊本県に存在しているのです。今回の地震により、これら装飾古墳の多くが被害を受けました。昨年度、文化庁は、「大規模震災における古墳の石室および横穴墓等の被災状況調査の方法に関する検討委員会」を組織し、熊本県と共同で県内市町村の協力を得ながら、装飾古墳の被災状況の調査をおこないました。調査をおこなった装飾古墳に共通して認められた損傷には、石室石材の原位置からのズレや崩落、破断、土砂の流入等があります。

特に、国史跡の井寺古墳(嘉島町)と釜尾古墳(熊本市)では、墳丘に亀裂があり、石室内に入ることができず、古墳内部の被害状況を把握することができない状況が続いていました。奈良文化財研究所では、文化庁と熊本県の要請を受け、この2つの古墳に対して、ファイバースコープと小型のモニタカメラを用いた羨道および石室内の観察と撮影をおこないました。井寺古墳では、羨道部において側壁の傾斜が大きくなり、石材が落下し、土砂が流出していることが、玄室内においても石材が崩落していることが認められ、特に石室南側の壁に大きな亀裂が



できていることも確認されました。いっぽう、釜尾古墳では、羨道部において、天井石の崩落、側壁のはらみと石材の崩落、土砂の流出が、玄室において、積石のはらみ、亀裂の拡大、積石の崩落が認められました。この2つの古墳については、現在、修復整備のための委員会が組織され、さらなる被害状況の把握のための調査手法の検討が始まられたところです。しかしながら、今城大塚古墳(御船町)や天神山古墳(宇土市)のように、墳丘が崩壊した状態で全く手が付けられていないものもあります。また、現状では石室内に入ることができるものについても、構造上の変化が認められ、その安全性が担保できないものもあります。これらの装飾古墳をいかにして安全性を確保していくのか、その問題は山積しています。

奈文研では、まずはその被害状況のデータを得るために、多視点ステレオ写真測量(SfM-MVS)、物理探査等の可視化のための技術協力をおこなうとともに、古墳の調査や保存に対する専門家派遣等、熊本地震で被害を受けた装飾古墳の復旧復興に向けて、全面的に協力をていきます。

2016年熊本地震により被災した装飾古墳の復興はまだまだ前途多難です。奈文研では、被災文化財の救援のための募金活動もおこなっています。皆様のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

(埋蔵文化財センター 高妻 洋成)



亀裂を生じて崩落している今城大塚古墳  
(写真提供:御船町教育委員会)



## 発掘調査の概要

### 藤原京右京七条二坊・四分遺跡の調査

(飛鳥藤原第192~2次)

2017年5月31日から約1ヶ月間、橿原市飛騎町で宅地造成にともなう発掘調査をおこないました。調査地は、藤原京右京七条二坊東北坪に位置し、弥生時代の集落遺跡である四分遺跡にもあたります。

調査の結果、藤原京期の遺構は削平されて残っていませんでした。いっぽう、弥生時代の遺構は調査区南辺で検出した東西大溝をはじめ、掘立柱建物、柵列、土坑、溝等がみつかりました。東西大溝は、幅2.6m以上、深さ1.3m以上の大規模な溝です。このほか、建物と思われる柱穴や土坑等が濃密に存在し、調査区周辺に建物等が複数存在することをうかがわれます。

出土遺物には、弥生時代中期から後期の土器とともに、石包丁や磨製石斧、打製尖頭器、石錐等がみられます。また、サスカイト剥片や砥石が出土することから、集落内での石器製作も推測されます。

これまでの四分遺跡の調査では、今回の調査区の北方150~300m付近で弥生時代中期から後期の竪穴建物、掘立柱建物や水田等がみつかっており、四分遺跡の中心部と考えられてきました。今回の調査区は少し南に離れていますが、集落域の一部と考えて良いでしょう。四分遺跡の集落域の広がりや変遷、今回検出した東西大溝の性格等については、今後の周辺の調査成果を待って慎重に検討する必要がありますが、弥生時代の四分遺跡を復元するうえで貴重な手がかりを得ることができました。

(都城発掘調査部 張祐榮)



調査区南辺の東西大溝(南西から)

### 藤原京右京二坊・醍醐環濠集落の調査

(飛鳥藤原第192~4~6次)

2017年6月5日から7月11日まで、橿原市醍醐町で宅地開発にともなう発掘調査をおこないました。調査地は、藤原京右京二坊に位置し、敷地の西端では西一坊大路東側溝の存在が予想されました。また、中・近世の醍醐環濠集落の西北部にもあたります。そこで、敷地内に6ヵ所の調査区を設定しました。

西一坊大路東側溝は、中世の集落をめぐる幅7m以上の環濠によって削平されていたため、残っていませんでした。今回の調査で検出した古代以前にさかのばる遺構は、古墳時代の斜行溝1条のみです。

いっぽうで、調査区各所で中世以降の醍醐環濠集落に関わる遺構を確認しました。集落北辺付近では、東西方向の幅5mの環濠を検出し、集落の西北角に沿って、環濠が西側で南に折れていく状況があきらかになりました。その南延長上には、先に説明した集落西側の環濠があり、その関係が注目されます。

これらの環濠の内側でも、幅3mの東西大溝と幅1.5m以上の南北大溝を確認しました。これらは埋土の様子が類似しているため、一連の遺構とすれば、複数の環濠がめぐっていた可能性も考えられます。このほか、中世から近世の掘立柱建物や井戸を調査しました。遺物では、漆器椀、曲物、鹿の骨、桃核等がみつかりました。

今回の調査では、中世から近世にいたる醍醐環濠集落の実態を示す、重要な成果があがりました。現在までつづく醍醐集落の歴史があきらかになる日も近いかもしれません。

(都城発掘調査部 張祐榮)



調査区全景(北西から)

## 平城宮東院地区の調査(平城第584次)

奈良文化財研究所では、2006年度以降、東院地区の遺構の状況を解明するために、南半や西辺を対象とした発掘調査を実施してきました。2012・2013年度(平城第503次)以降、4年ぶりとなった今回は、西辺から東の中核部にかけての遺構の様相をあきらかにする目的で調査を実施しました。調査期間は2017年2月6日から5月29日まで、調査面積は1,103m<sup>2</sup>です。

今回の調査区は、これまでの西辺の調査のなかで北東端に位置します。調査の結果、奈良時代の掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条、溝5条、石列1条等を検出しました。これまでの調査成果により、東院地区の遺構は1期から6期までの6時期に区分できることがわかっています。今回の調査で検出した遺構は、奈良時代末の6期を除く、5時期にわたります。

最も顕著な成果は、奈良時代前半の長大な南北棟建物2棟を新たに検出したことです。これらの建物は柱筋を揃えて東西に並んでいます。西の建物は南北10間(約29.4m)、東西2間(約6.0m)。いっぽう、東の建物は南北10間(約29.4m)、東西2間(約5.4m)であり、東側に出が11尺(約3.3m)の廂がつくと考えられます。これらの建物の間には10尺(約3.0m)の間隙があります。これら2棟が同時期に並び建っていたのか否かについては、今後検討が必要です。なお、これまでの東院地区的調査では、これほど大型の南北棟建物が2棟並んでみつかったことはありません。また、東の中核部に近接しており、これらの建物が重要な機能を担っていた可能性があります。

奈良時代後半には、今回の調査区の東辺で南北塀が南から続き、調査区北半で東に曲がることがわかりました。この南北塀は、南の調査区(平城第503次)において検出した東西塀に接続します。これらの塀

により、中核部があった東側の空間が区画されていましたことがわかりました。また、南北塀の西側では、南から続く南北棟建物の全体規模をあきらかにしました。建物の規模は、南北9間(約26.6m)、東西2間(約6.0m)で、西側に出が10尺(約3.0m)の廂が付属します。この建物と、西の調査区(平城第481次)で検出した同規模の南北棟建物は、柱筋を揃えて建てられています。これらを東西の両端として、両棟の北辺と南辺を結んだ長方形の範囲に、複数の建物が柱筋を揃えて配置されていたことが新たに判明しました。したがって、東院地区西辺の一角には、東の南北塀と南の東西塀により区切られた、企画性の高い空間が設けられていたことになります。

なお、奈良時代末には、今回の調査区では建物が徐々に少なくなり、最後には建物がなくなります。

今回の調査では、東院地区西辺における土地利用状況の一端があきらかになりました。とくに、奈良時代末にかけて遺構が少なくなる傾向がみられました。これは、今回の調査区が、西辺の中でも東端にあたり、東の中核部との間際に位置する東西に狭隘な空間であったことと関係すると思われます。狭隘であったゆえに、当初は南北棟建物が目立ち、次第に建物のない空間として利用されるようになったと考えられます。

5月21日には現地説明会を開催しました。5月とは思えない炎天下にもかかわらず、519名の方々に足を運んでいただきました。日陰もない中で熱心に耳を傾けて、時にはご質問いただき、関心の高さを実感しました。今後も東院地区での発掘調査を継続し、また新しい成果をご紹介していきます。

(都城発掘調査部 山藤 正敏)



調査区全景(南東から)



現地説明会の様子(南西から)

セットで用いられた人形



(实物大 ※左：カラー写真 右：赤外線写真)



人形の出土状況 (平城第566次東区 朱雀大路西側溝)



短冊状の木札に切り込みを入れて、人間の形を表現したもの人形と呼びます。奈良時代にはこの人形を用いた祭祀がおこなわれていました。人形に自分の穢れ(病気や災い)をうつし、呪いをかけて溝等に流すことでそれらを払おうとする行為です。2016年に実施した朱雀大路西側溝の発掘調査でも、15点以上の人形が出土しました。古代人が穢れをうつして流した人形を現代のわれわれが偶然発見した、というわけです。

さて、ここに示したのはその調査で溝の西岸からまとめて出土した5点の人形です。いかがでしょうか? 左上の2点ずつと右下の3点ずつは、人形の作り方や墨書の様子がとてもよく似ていると思いませんか? 例えば左上の2点。やや撫で肩で脇から脚に向かってやや外に開く外形、そして彫り込みと墨書で表現した顔が酷似しています。墨で塗りつぶしたおでこ、たれ目、大きな口とその周りに描かれた放射状の罫と思しき墨線…。何ともリアルで、夢に出てきそうです。下の3点はどうでしょう。こちらは、撫で肩で腰部にV字の切り込みをもつユニークな外形。顔は輪郭線で囲んでその中に目、鼻、口、罫を墨書きし、さらに胸部にはいくつもの波線や直線を描く表現が一致します。胸部を埋め尽くす波線や中央の「ロ」の字が、いったい何を意味するのか、残念ながらよくわからっていません。一般的な人形は、目、鼻、口だけを線で表現するため、これほど墨書きがみられる人形はかなり稀です。今回の発見は人形のバリエーションを知る上でも重要といえます。

では、なぜ瓜二つの人形が複数あるのか。これは人形がセットで用いられたためと考えられます。しかもこれらは同じ場所から出土しているので、それらと一緒に流した可能性が非常に高いのです。穢れを何枚もの人形にうつし祈る古代人の姿が蘇ってくるようです。

(都城発掘調査部 芝 康次郎)



## 遼寧省文物考古研究所との共同研究

奈良文化財研究所と中国・遼寧省文物考古研究所は、1996年の友好共同研究の締結以来、20年以上にわたって継続的に共同研究を進めてきました。この間、「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究」、「3～6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」、「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」、「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」の4つの研究課題に取り組み、古代日中の文化交流に関する研究成果を国内外に広く公表・発信してきました。

本年度からは、「三燕文化出土遺物の研究」と題する新たな共同研究に着手しています。その一環として、6月24日より7月1日まで、李竜彬副所長をはじめ4名の方々を日本へ招へいしました。今後4年間の共同研究の進め方について協議するとともに、日本の関連資料や遺跡・文化財の保存・活用状況等を視察していただきました。また、李副所長による所員向けの講演会を開催しました。多くの研究員が、「遼陽市で新たに発見された河東新城後漢壁画墓とその相関する問題について」と題する講演に耳を傾けました。

河東新城後漢壁画墓は、マンション建設に際して不時発見された後漢末期の壁画墓で、墓室入口部の壁面に被葬者とみられる人物をめぐる宴席の場面や、馬、牛耕、牛車等を描いた壁画が遺存していました。質疑応答では、墓の構造や壁画の内容に対する解釈、壁画の保存方法に議論がおよび、高松塚古墳・キトラ古墳の調査と保存に携わる奈文研にとって、たいへん有意義な講演会となりました。

10月には、奈文研の研究員が遼寧省を訪問し、日本の古墳文化にも大きな影響を及ぼした三燕文化の出土遺物を調査する予定です。今後も両研究所の学術交流の発展にご期待ください。

(都城発掘調査部 廣瀬 覚)



講演会の様子－李竜彬副所長(右)

## 文化財写真技術研究集会の開催

家庭の写真やSNS等で気軽に共有でき、一般用途には広く普及しているデジタルカメラ。写真の楽しみも広がっています。そのような時代ですが埋蔵文化財調査の記録写真では、現在でも遺跡のすがたを確実に保存するためにフィルム写真が使われています。しかし年々縮小する需要がその周辺環境におよぼす影響も大きく、フィルムの入手困難や保存性の低下等が進んでいます。

こういった状況を鑑みて、2017年3月末に文化庁より「埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について 1」という報告が出されました。これは全国の埋蔵文化財調査機関向けに、フィルム写真の品質や保存性を確保しながら積極的にデジタル写真の技術を導入する指針を示した報告で、奈文研の写真室もこれまで培ってきた技術と、近年試行してきたデジタル技術を提供しています。

この報告内容を写真室が中心となって実施している「第8回文化財写真技術研究集会」(7月7日開催)において、文化庁より近江俊秀調査官をお招きして講演会を実施いたしました。

当日は参加者100名を超え、参加者の关心の高さがうかがえる研究集会となりました。近江調査官の講演に続き、報告をまとめるにあたり専門委員となった各氏をmajieて意見交換会も実施し、具体的な機材の指針や保存に関する方法論等活発な意見交換がおこなわれました。

報告や研究集会を経て、埋蔵文化財記録写真分野でも積極的にデジタル技術が導入されることになりますが、技術・保存の面でまだまだ抱える問題もあり、今後も文化庁と写真室・研究会が全国の埋蔵文化財調査機関をサポートするために、研修会や講演会の開催等を実施していく必要があります。

(企画調整部 中村一郎)



研究集会における近江調査官の講演

## 造園大賞の受賞

2005年に「文化的景観」が文化財類型に加わり、翌年の2006年に奈良文化財研究所に景観研究室が新設されました。筆者が採用されたのはその翌年の2007年、所内初の文化的景観の研究員として、でした。しかし、当時は文化的景観保護に関わる制度も概念も未熟で混乱のさなか。関わる皆が手さぐりの状態の中、藁にもすがるような思いで質問されるものに応えられず、苦しい状況が5年ほど続きました。このような手さぐりの状況を、「フィールドで調査する」「みなで議論する」「形にして伝える」という3つの方法を相互に関わせながら進めることで、徐々にこの悶々とした状況を整理していくことができたと思います。

フィールドでの調査は、四万十川流域を皮切りに、宇治市、京都市、佐渡市、岐阜市等で実施してきました。こうした実践的研究と平行して2008年度から文化的景観研究集会を毎年開催し、2015年度からはシンポジウムとともにポスターセッションとエクスカーションもスタートさせました。文化的景観の学術や取組に関わるメンバーにとっての情報交換の場となりつつあります。ただし、文化的景観研究集会は公開型のシンポジウムのため踏み込んだ議論をすることがむずかしく、2012年度からは少数の固定メンバーで議論をおこなう「文化的景観学検討会」も立ち上げ、定期的に話し合いをおこなっています。

また、調査報告書やシンポジウムの報告書等を1年に1冊は刊行するようにしています。研究成果をひろく伝えるためですが、文字にすることで考えを整理するという側面もあります。2015年度からは「文化的景観スタディーズ」というシリーズ名をつけての刊行をスタートさせました。

こうした取組をおこなってきたことを受け、本年5月、「文化的景観の概念形成と制度運用の充実に資する貢献」として東京農業大学より造園大賞をいただきました。しかし、この栄誉はけっして筆者個人に対するものではなく、文化的景観に関わる調査研究をともにおこなってきた歴代景観研究室のメンバー、文化財や都市計画、地域づくり等のさまざまな立場の行政担当者、地域住民やコンサルタント等の方々との協働に対するものだと理解しています。

(文化遺産部 恵谷 浩子)

## 「文化財保存修復研究基金」へのご寄附のお願い

奈良文化財研究所は、主に平城宮跡や飛鳥・藤原宮跡等の都城遺跡の発掘調査研究を通して、日本の古代国家誕生の歴史と日本文化の形成過程の解明に努めています。さらに、長年にわたる都城遺跡の調査研究で培った知識や技術を、全国の遺跡の調査研究と保存、整備活用に役立てるとともに、海外の遺跡保護のための国際協力事業や技術移転にも積極的に取り組んでおり、その活動には、国内外から大きな期待が寄せられています。

こうした奈文研の調査研究業務は、国からの運営費交付金によって支えられていますが、昨今の厳しい財政状況下で、運営費交付金が減額の一途をたどっており、広く外部資金を獲得して、研究所の運営に役立てることが求められていることから、「文化財保存修復研究基金」を創設し、皆様に広くご寄附をお願いすることにいたしました。

寄附金については、通常の奈文研の調査研究業務のほかに、以下の事業に重点的に活用いたします。

- ① 被災文化財の救出と保存修復事業
- ② 国際協力事業（カンボジアのアンコール遺跡群西トップ寺院の修復事業等）
- ③ 埋蔵文化財の発掘調査報告書の全文電子化と公開事業（『全国遺跡報告総覧』の整備）
- ④ 木簡の水洗作業と保存処理事業
- ⑤ 発掘された遺跡の地震・火山災害に関する情報収集とデータベースの構築・公開事業

なお、寄附の方法、その他詳細につきましては、奈文研ホームページをご覧ください。

皆様の温かいご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

(研究支援推進部 津田 保行)



## 飛鳥資料館 秋期特別展「高松塚古墳を掘る—解明された築造方法—」

壁画の劣化が問題となり、高松塚古墳の石室解体事業がおこなわれてから10年。石室解体事業にともなう発掘調査は、文化庁の委託を受けた奈良文化財研究所が、奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会とともに実施しました。その結果、墳丘や石室の構築に関わる重要な考古学的知見とともに、壁画の保存環境の劣化に関する情報も得られました。

今回の展覧会では、発掘調査によって得られた土層のはぎ取りや地震痕跡の型取り等の資料を展示し、高松塚古墳の築造方法と壁画の保存環境に迫ります。あわせて石室解体に使用した治具等も展示し、奈文研が関わった石室解体事業とその後の10年を振り返ります。貴重な国宝高松塚古墳壁画を後世に伝えるために、文化財関係者が総力を挙げて取り組んだ前例のない調査の記録をご覧ください。

(飛鳥資料館 石橋 茂登)



墳丘の土層断面と地割れ

会 期：2017年10月6日(金)～12月3日(日)月曜休館(祝日の場合は翌平日)

11月3日(金祝)は無料入館日

開館時間：9：00～16：30(入館は16：00まで)

講演会：10月28日(土)13：30～「高松塚古墳の構築技術を解明する」講師：廣瀬 覚 於：飛鳥資料館講堂(事前申込不要)

ギャラリートーク：11月23日(木祝)10：30～、13：30～

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎0744-54-3561(飛鳥資料館)

## 平城宮跡資料館 秋期特別展「地下の正倉院展—国宝 平城宮跡出土木簡—」

奈良文化財研究所では、2007年より毎年「地下の正倉院展」を開催し、出土木簡の実物展示をおこなってきました。この特別展は、年に内裏北外郭官衙出土木簡が重要文化財に指定されたことをうけ、貴重な文化財としての木簡を広く一般の方々の観覧に供する機会を設けることを目的として始まりました。

平城宮跡出土の木簡はこれまで、2003年指定の大膳職推定地出土木簡から、2015年指定の造酒司出土木簡まで、計4件、2,875点が重要文化財指定を受けてきました。そして本年3月、これら重要文化財を統合しつつ、新たに309点の木簡を加えた計3,184点の木簡を「平城宮跡出土木簡」として国宝に指定するよう答申されました。木簡としては初めての国宝指定となります。

このことを記念し、今年は、国宝指定の答申を受けた木簡の实物を展出する特別展を開催します。平城宮跡の発掘調査最大の成果の一つでもある「平城宮跡出土木簡」を、多くの方にご覧いただければと思います。

(都城発掘調査部 山本祥隆・藤間温子／企画調整部 座朝えみ)

会 期：10月14日(土)～11月26日(日)月曜休館

I期：10/14(土)～10/29(日) II期：10/31(火)～11/12(日) III期：11/14(火)～11/26(日)

開館時間：9：00～16：30(入館は16：00まで)

ギャラリートーク：(I期)10/20(金)、(II期)11/2(木)、(III期)11/17(金)各日14：30～

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問合せ：☎0742-30-6753(連携推進課)



【開々司前解】と  
書き出す過渡書  
(パスポート)木簡

### ■ お知らせ

#### 第9回東京講演会

「デジタル技術で魅せる文化財—奈文研とICT」

2017年10月7日(土) 10：00～16：00

於：有楽町朝日ホール

#### 第121回公開講演会

2017年11月11日(土) 13：00～16：00

於：平城宮跡資料館講堂

### ■ 記録

#### 文化財担当者研修(専門研修)

○出土品管理・活用課程

2017年7月10日～7月14日

22名

○灾害痕跡調査課程

2017年7月24日～7月28日

5名

○遺跡情報記録調査課程

2017年9月12日～9月15日

8名

○文化的景観整備活用課程

2017年9月20日～9月22日

6名

#### 平城宮跡資料館 夏のこども展示

7月22日(土)～9月3日(日) 10,882名

「ナント！ すてきな！？ 平城生活♪」

#### 飛鳥資料館 夏期企画展

7月28日(金)～9月3日(日) 2,930名

第8回写真コンテスト作品展「飛鳥の路」

#### 飛鳥資料館 夏休みイベント

8月9日(水)・10日(木) 103名

「つくろう!ミニチュア玉枕」

#### 飛鳥資料館 夏休み展示

8月15日(火)～9月3日(日)

「ボク、ワタシが撮る写真—奈良県立高校写真一」

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2017年9月